

備陽史探訪

第45号

発行

 備陽史探訪の会
 福山市多治米町5-19-8
 TEL(0849)53-6157

創立十周年を迎えるにあたって

会長 神谷 和 孝

この文を書いている現在は真夜中です。家族も寝てしまい、静まりかえった時間にユックリと今までの備陽史探訪の会の歩んできた道のりをふりかえって見たかったからです。

一口に十年と言っても、最初からの記憶をたどって文章に細かく書いてみたら一寸とした冊子になる位あるのだと思います。

十周年と言っても、備陽史探訪の会と会の名称を定めてからであって、それまでの伏線が数年あるのです。

その点については殆んどの会員の方が御存知ないのだと思います。

その伏線がないと備陽史探訪の会の十年が語れない訳なので、その辺を回想しながら文章にしてみましよう。

十四、五年前になるでしょうか、歴史の好きな高校生グループ五、六

人が私の家に尋ねて来て呉れました。歴史の勉強をしたいと、皆んな燃えていました。そのグループのリーダーが今の副会長の田口義之氏です。そんな出会いが縁となって、田口氏が大学を卒業して福山に帰って来て日曜日には時間を見つけては、福山周辺の山城趾、古墳などを片っぱしから見まわりました。私を除いて独身者ばかりだったので、あの頃はよく動きまわったものだと思います。少人数での史跡まわりが、そろそろ落着いたころ周囲の人にも声をかけて一緒に勉強してみてはとの意見の一致を見てマスコミを通して市民の皆様が誘いかけをしたところからが備陽史探訪の会の発足となる訳です。それ以後のことについては、また場を改めて記したいと思います。

十周年と言っても当会にとっては通過点であって、今までの十年間の総括をして、その内容にそって今後の活動方針をたてていけば、当会は更に発展の途をたどると確信しています。

その心算で十周年の記念行事は、当会としては内容のあるものと役員会では話し合いを積んで参りました。今のところ二月十一日(日)新しく出来る県立博物館で、今、最も注目されている吉野ケ里遺跡の発掘の責任者の高島忠平先生を講師に迎えて記念講演会を開き、その後、福山駅前ニューキャッスルで盛大に記念パーティをと考えています。また、希望もあったので会報の復刻版を発行して皆様に見ていただければと考えています。

この十年、当会は皆様の希望を大切に、たてた計画は必ず実行にと頑張ってきました。それも会員の皆様の御協力で十年間継続してこられました。

十周年を皆様と共に喜びたいと思います。

目次

- 創立十周年を迎えるにあたって
て 会長 神谷 和孝(1)
- 安部晴明と備後国風土記
堤 勝義(2)
- 無題
藤代 由子(4)
- 幻想・杉原盛重紀行
小島製炭春(4)
- 悲運の江美城跡 山陰旅行に参加して
末森 清司(6)
- 山陰杉原盛重紀行に参加して
藤井 忠夫(7)
- だらけの車中 熊谷 操子(8)
- 山陰の旅つづり方狂室
後藤 匡史(9)
- 山陰旅行をおえて
杉原盛重公の足跡を訪ねて
佐藤 錦士(10)
- 田尻町の史跡めぐり要項(11)
- 吉備路古墳めぐり募集要項(12)
- 山陰杉原盛重紀行拾遺(9)
- 武将の花押(和智氏、杉原氏編)

安部晴明と 備後国風土記

堤 勝義

一、はじめに

安部晴明は陰陽道の土御門家の開祖として知られているところである。『広辞苑』第二版の晴明の項目には「平安中期の陰陽家、よく職神（しきかみ）を使い、あらゆることを未然に知ったという。金鳥玉兔集、占事略決などの著者、伝説が多く、小説戯曲に用いられる。」とある。

『備後国風土記』は蘇民将来・巨旦兄弟の物がたりとしてよく知られているが、安部晴明はこの物がたりを自分の陰陽道の著作にとり入れて、陰陽道用に手直しをしている。

ここでは『備後国風土記』の要約をあげ、次いで、安部晴明や陰陽師について簡単であるが書いてみたいと思う。

二、備後国風土記について

「備後国風土記」（『釈日本記』所収）を要約してみると、「むかし北海の武塔の神が南海のむすめに求婚するために出かけたが、日が暮れてしまった。そこに将来が二人いた。兄の蘇民将来はたいへん貧しく、弟

の将来は富んで屋敷が百もあった。そこで武塔の神は弟の方に宿を借りようとしたが、物惜しみしてことわり、兄の蘇民将来はこころよく迎え

いれ、貧しいために粟の茎を産とし、粟飯などを饗応した。やがて宿り終えて出立したのち、何年かたつてふたたび八柱の神子をつれて立ち寄り、

詔いたまわく、わたしは将来の思い報いをしよう。汝の子孫は家にいるかとたずねた。蘇民将来はじぶんの女と妻がおりますと答えると、それでは茅の輪を腰の上につけさせよと仰せられた。そこで詔のとおりにつ

けさせたところ、その夜に茅の輪をつけないものはことごとく殺してしまった。そして、われはハヤスサノヲの神である。もしものちの世に疫病がはやったら、汝は蘇民将来の子

孫だといって、茅の輪を腰につけている人は災厄をのがれることができよう。と仰せになった。」とあり、「蘇

民将来の子孫だといって、茅の輪を腰につけている人は災厄をのがれることができる」ということが、祇園信仰（牛頭天王）の普及と共に弘

まっていたのである。京都八坂神社の祇園祭は、この茅輪信仰にもとづくものであり、疫病よけの祭である。この神は「タタリ

神」であり、御霊信仰（菅原道真を祀った天神等）と同じである。

悪人には懲罰として疫病などの禍害を科するが、牛頭天王を信敬する人々には、息災安穩、寿命延長、五穀成就、財宝満足などの幸福を与えるのである。

備後地方の祇園系神社としては、

新市の素戔鳴神社、鞆の沼名前神社、甲奴町の須佐神社が著名であり、新市の素戔鳴神社については、享保十六年（一七三一）に金剛峰寺釈迦文院維宝が記した「備後州品治郡早苗山天竜院天王寺祇園社祠記」では、当社を「備後国風土記」逸文の蘇民将来伝説にみえる「疫隅の国社」と結びつけている。

また、沼名前神社については『福山志料』は「備後国風土記」逸文にみえる「疫隅国社」に比定している。

三、三国相伝陰陽館轄ホキ内伝金鳥玉兔集について

『統群書類従』第三十一輯上雑部所収（統群書類従完成会）では「ホキ内伝」の見出しがついているが、「金鳥玉兔集」とも呼ばれている。

正式には、「三国相伝陰陽館轄ホキ内伝金鳥玉兔集」天文司郎安部博士吉備后胤清明朝臣撰とあるが、ここでは、ホキ内伝と統一して書く

ことにしたい。

「牛頭天王が南海におもむく途次、南天笠のかたわらに夜叉国（広達国）という国があり、その鬼王を巨旦

大王といったが、この巨旦が天王の滞留をこわった。そこで天王は千里の松園の林のなかに隠れていると、そこに一人の賤女がいたので、しば

らく滞留を乞うたところ、このさき東の方一里ほどのところに蘇民将来という慈悲深い者がいると教えられ行ってみると、高齢の老翁がワラグ

つをはき、ワラ屋のなかのちりを柴の箒ではいていた。一夜の宿を乞うと、貧賤で家が狭いのを理由にいっ

たんは固辞したが、やがて招じられ、梁や栗の茎で席をこしらえ、瓢中にあったけなしの粟米を煮て飲待し

た。天王はその厚い志をよるこび、身は孤独でも、心が豊かでけだかいことを賞讃した。やがて天王は、巨

旦一族を全滅させたが、そのおり親切にした巨旦のところの賤女を助けるために、桃木の札をけずって呪詛、如律令という呪文を書写して弾指せしめ、これを彼女の袂のなかに収めて禍災をのかわせたのち、巨旦の屍骸を切断して五節に配当し、調伏の威儀を行なった。その後蘇民将来のところにいたり、長者にさせ、誓

願してわが末代は行疫の神となるも、汝の子孫なりといえは危害はないと教え二十六の秘文をさすけた。さらに五節の祭礼を違わざれといった。それは正月一日に赤白の餅を鏡にするのは巨旦の骨肉、三月三日の蓬萊の草餅は巨旦の皮膚、五月五日の菖蒲結びと粽は巨旦の鬚髪……」

「ホキ内伝」の中には桃木の他に太山府君とか天刑星とかいった言葉がみい出せるが、これらは中国の道教に關係しているものである。

桃木については、道教の中に「符箓」といって桃の木で作った符がある。桃は邪気を払い百鬼を制する仙木として中国では古くから信ぜられていた。例えば①この符を帶するものは死籍を削られ不死となる。②罪を犯した人でもこの符を帶すると、符の力によって罰を免れ長生する。

③諸天善神が守護してくれ、天人とともに遊樂できる。④肺病にならず現に病むものも直ちに全治する。

⑤肝・心・脾・肺・腎の五臓から起る中風を治す。⑥疫病にかからず、あらゆる病人をたちまち全快せしめる等である。

安部晴明は中国固有の宗教「道教」を陰陽道にとり入れている事がわかる。

四、安部晴明と陰陽師について

陰陽師は、陰陽五行思想にもとづいて占いや祭儀を執り行なう宗教者である。律令制の下では、陰陽寮という役所で、さまざまな祭儀の研究を行っていた。

藤原明衡の『新猿蓑記』の中に出てくる陰陽師は「物をおおいかくして、その中にあるものを占い当て、もののけ、の正体を見破り十二神将（薬師如来についている）や三十六さん（昼夜交互に現われ、修験者等を悩ますきん獣）を動かし、式神を操り、符法によって鬼神の目を意のままに開閉し、男や女の魂魄を自由に出入り入れできるといふ」人物であった。

安部晴明については『源平盛衰記』巻十に「一条戻橋と云ふは、昔安部晴明が天文の淵を極めて十二神将を仕ひにけるが、其妻職神のかおに畏れければ、彼十二神を橋の下に呪し置きて用事の時は召仕ひけり、是にて吉凶の橋占を尋ね問へば必ず職神人の口に移りて善悪を示すと申す。」とある。

また『宇治拾遺物語』巻二え八の晴明蔵人少将封ずる事として「殿上人が参内するのを眺めていた安部晴明はまだ年若く器量の良い蔵人の少

将が、車から内裏に向う姿を認めた。このとき、少将の上に鳥が飛来してふんをしかけた。これをみてああ、まだ年も若いのに式神に打たれてしまったらしい。あの鳥は、きっと式神と思った。気の毒に思った晴明がこのことを少将に知らせると彼は驚きふるえて晴明に救いを求めた。そこで晴明は彼の家に赴き、彼に身固めの術を施し、夜通しきとうを行なうてやった。明け方になって戸を叩く意がするので、人をやつて訪問者の話を聞くと、次のようなことが明らかになった。この少将の相智（少将の妻の姉妹の夫）に蔵人の五位である男がおり、同じ家に住んでいたが、皆が少将の方ばかりはめるので少将を憎み、陰陽師をやつて彼を呪い殺そうとしたのであった。この使いの者は、陰陽師に命じられて晴明の所に来たもので、陰陽師は、自分の「式神」を祈り出して少将のもとに送りつけ、呪殺しようとしたのであるが、晴明に見破られて、彼の式神は送り戻され、逆に晴明の派遣した式神に打たれて、ひんしの状態にあると伝えて来たのであった」とある。

誇張もあるけれども、現在の我々ではとても信じられないけれども、

当時の人々にとっては、病気や災難は鬼のする事と考え、陰陽師や修験者に力をかりたり、まじない札を軒下にかけてたり、家の門口に結界をして、鬼の侵入を防いだりしたのである。

最近まで蘇民将来については、三重県の伊勢市の家々には門口に「蘇民将来子孫門」と書いた門守りをかかげるものが多い。長野県や岩手県でもよくみられ、水沢市の黒石寺では、蘇民祭があり、護符のはいった蘇民袋を奪いあう。

東京国立博物館所蔵の「不動利益縁起」には安部晴明が、三井寺の僧智興の病気を身代りに立った証空へ引き移すための祈禱をしている場所があり、晴明が祭文を誦み、祭壇の向う側に並んでいるのは病氣の原因の妖怪（もののけ）たちで、妖怪には器物の付喪神もいる。晴明の左脇やや後方で合掌して座している二人は、晴明の駆使する式神等が画かれている。

五、出土の呪術資料について

『中世の呪術資料』（一九八四年六月二―三日に開かれた第四回中世遺跡研究会資料）所収の「中世遺跡出土の呪等」志田原重人には、呪符出土遺跡として二十七遺跡があげ

られている。

中世の呪術資料中の各地の発掘報告をみてみると、元興寺境内遺跡

(奈良市、一九六三年七月五日―八月五日調査)に「八万四千六百五十四神王」呪符。

道場田遺跡(静岡県焼津市、S 五七年五月十七日―五九年四月十日調査)に「蘇民将来子孫也」

小川城遺跡(静岡県焼津市、S 五六年三月十七日―五九年四月十日調査)に「蘇民将来子孫也」「天形星皇、蘇民将来子孫」等が出土している。

無 題

藤代 由子

二、三年前から約束していた友達の所へ遊びに行った。草深い所で以前行った事のある井原より大分北の方で山々にかこまれた自然のそのまゝ残っている所。小川の水も澄んでいてうらやましかった。

立派なお寺が二つあるので見に行かないかと云う友の言葉をまともに受けて後について行った。草ぼうぼうで通る道もせまく、やせている。私一人やっと歩ける程度、心細くても後には引返せない。着いた時は見る影もなく屋根は落ち壁は無く無残な姿を見せていた。絵馬だけが何故かきれいで昔の面影を残していた。

栄古衰盛とはこんな事かとつくづく思い、遠い昔我が子の無事を祈ったであろう母の姿を思い浮かべた。

早々に友と下山し世のはかなさを語り合った。

草深い小道を行けば 寺一つあざみ咲く道なき道に つゆ光る

幻想・杉原盛重紀行

小島 製髮春

杉原盛重は幸運な武将であった。

弘治三年(一五五七年)神辺城主であった、主君の杉原理興が病没したが理興には、後を嗣ぐべき子が居なかった。毛利家では協議の上、元就の次男元春の推選を入れ、理興の家中では四番家老であった、杉原盛重を後任に定めたと云う。盛重にとつては正に晴天の霹靂、予期せざる選抜であつたに違いない。しかし、必ずしも喜んで計り居れない状況もあつた。この時元就の三男隆隆は、一番家老の人格者で衆望もあり又武勇にも勝れた、杉原興勝を推選し、

乱暴者で博奕を好み強引な戦い振り見せる盛重を嫌つたと云う。以上は陰徳太平記の抜粋であるが、この事は以後の盛重(一族)の命運を司どつた伏線でもあつた。この頃毛利家では、山陽方面は隆影、山陰方面は元春、と主たる担当を定めて居た節があるので、元春の推選を受けた盛重は必然的に故郷を遠く離れた山陰方面に活躍の主舞台を移す事になる。後年、盛重は備南、伯耆を合せ持つ

が神辺城を中心とする政情は必ずしも盛重の意のまゝではなかつた様だ。横山家文書に小早川隆影の影がちらつく。

今一つ盛重は理興の遺臣を全部引継ぐ事は出来なかつた。理興の維幕を構成して居た藤井皓玄、大江田隼人介等は盛重を嫌つて浪人してしまつたと云う。これも又後年の禍根の種ともなつた。一番家老の杉原興勝も盛重の家臣に見えない、無責任な推理だが多分木梨の城に戻り小早川の指揮下に入つたのであろうか。

横道に入るが毛利元就の上位三子を見ると面白い事に気付く。長男隆元は別として、次男元春は父の戦術家の面を継いだ、勇武で剛毅果断、又人情家でもあつた、だが彼の行く所激戦が多い。三男隆影は戦略家の面を継いだ、温厚沈着、又非情でもあつた(味方にも)、天正九年元春が馬野山に秀吉の大军を迎へた時富田城から動かかなかつたし、翌年備中高松城に清水宗治を見捨てたのもその好例である、彼はイチか、バチかに賭ける様な人物ではなかつたのである。

さて、盛重は元春の眼から見れば誠に頼りになる男であつた。当然盛重も又恩義に報いる、年号が変つた翌、

武将の花押

和智氏

No. 2

吉舎南天山城主

和智豊廣



(浄土寺文書五六号)

永録元年二月石見国出羽の戦いはその始めであった、「山城志八集」森山繁先生の文を引くと、吉川元春の召集を受けた盛重が手勢八百を率いて戦場に到着していると、さしも剛勇を誇る吉川軍が本庄、小笠原軍の猛反撃を受けて氣息えんえんであった。盛重は猶予ならじと僅か八百で優勢な敵の横から突込んで行った。赤地に三ツ巴の旗をなびかせて敵の横手に突込む盛重軍を見て俄然吉川軍は息た吹き返したとある。この攻め方を魚鱗掛りと云う。他目には勇ましいが小勢の場合は決死の突撃でもある、戦いは勝ったが盛重軍の損害は、横山家文書の同年七月二六日付国元への書状に「手負死人依有数多」云々はこの間の事情の一端を物語る、だが盛重の心は主君元春の危急に間に合った喜びに溢れて居た、一戦が終り幔幕をめぐらした陣所の中で元春の前に片膝付いて着到の挨拶を述べる盛重の声は弾んで居たに違いない。しかし元春はどうであらうか、まさか急地を脱した上気嫌で「良い所へ来て呉れたぞ拔群の功である」てな事は間違っても云うまい。意外な苦戦に心中苦虫を噛みつぶして居たかも知れない。私しが元春の立場ならせいぜい「御苦労、以後も怠ら

ず務めよ」、位かな。……こうした経験から盛重の戦法は変った。猛將に智将の面がプラスされる。それを一番喜こんだのは元春である自分の眼の確かさを内心誇りに思ったであろう。永録七年、共に毛利家に忠勤を励んで来た、伯耆尾高城主の行松正盛が中風で死んだ。彼の子、徳若松千代の二人は幼い、尾高城は富田城に対する東の最前線である。毛利家では協議の上、幼児後見の名目で杉原盛重を入城させ、行松未亡人と結婚させた。それは前年の白鹿城攻めの功績とその頃盛重の妻が亡くなつて居たからと陰徳太平記は記す。「山城志八集」の森本先生の文を引くと、尾高の行松夫人は絶世の美女であつたと云う。私も大賛成だ、しかしそれはあくまで男の云い分である。行松夫人はどの様な思いであつたらう、夫の喪に服する暇もなく次の夫を迎へねばならぬとは。……私しの幻想は続く……そうだが女も戦国だったのだ、それに盛重とて神辺城の妻の喪中であつたらう、共に喪中の男女が自分の意志とは無関係に結婚させられる、政略結婚とはそう云うものだ。……だが男女の仲は不思議なものである、それ故強い絆で結ばれた男女も多い、武田勝頼と北

条夫人、柴田勝家とお市の方、その他数へ切れぬ程に。……そう云へば盛重は弘治三年神辺城主に補任された時、毛利家から夫人を与へられている。「山城志八集」の森本先生の文を引くと「御五もし」と云い元就の姪で当時年令は四十台後半、盛重で四度目の夫、とある。今回の探訪旅行で立石先生は、この方も絶世の美女である、と云われた。私はこれにも大賛成である。……私しの幻想は続く……盛重はこの時初婚であつたらうか？……先の森本先生の検証を引くと盛重も三十台後半とあるから妻が無かつたとは思へない。……同じく盛重の子は五人で長男元盛の前に女子が一人ある、すると盛重は「御五もし」を迎へる為一女ある前妻と別れたのであろうか。……：会见大安寺住職の著書に「御五もし」は元盛、影盛を生んだとある。……：「そうだーその証拠はある。陰徳太平記の天正九年十月吉川元春が馬野山で秀吉と対陣の折、病中の父に代つて出陣した元盛、影盛兄弟に付いて元春は、「未だ二十一、二才の若者で如何かと思つたが父に似て豪胆な事である」と、云つて居る、これを逆算すると永録一、二年、即ち結婚一、二年の出生となる、まさか結

婚と同時に側室を入れたとは思へぬから「御五もし」の子であらう。……：たゞ気掛りの点がある。前妻が別れた頃身籠つたとすればである。ここに横山家文書、高須影勝書状がある年代不明の拾月二十日書状に……：弥八郎殿（元盛の事）御母儀御遠行云々……とある、（影盛の名はない）……：これは小早川家臣の影勝が盛重家臣の横山九郎左エ門に元盛の母の死を知らせた書状であるが、これは変だ、「御五もし」は神辺城に居た筈なのだから、神辺城詰の九郎左エ門が知らぬ筈はない？……：幻想は続く……：盛重の前妻は高須家の出身で、離別後実家に戻つて元盛を生んだ、と、そして間もなく「御五もし」も影盛を生んだ、兄弟の年令は余り差はなからう。そしてそこに後年の悲劇の芽が生じたのである。……：幻想は未だ続く……：「御五もし」は過去三人の夫達との間に子は無かつた、それが五十才近くになって盛重の子を忽ち宿す、「御五もし」は、この年になって始めて、男盛重を全身で受入れたのであつた。後、三男影保を生んで間もなく……：「御五もし」は最晩年にして始めて充実した人生を味つたのであつた。……：幻想は前に戻る、尾高城での夫婦も

又仲睦まじかったが形式はとも角、実際は婿入りである。現地の人達は「伯州の神辺殿」と呼んだと云う。だがこれは果して讃め言葉であろうか、私には淋しい言葉に聞こえる、私は山梨県出身だが「福山の山梨人」と云われたら、ぐっと孤独感が身に染みる、「伯州殿」。盛重はそう呼ばれたかったに違いない。たゞ美しい尾高夫人が居る、それに戦局は盛重を落着かせなかった。永禄八年毛利軍は大挙富田城を三方から攻めた、盛重は何故か菅谷口の隆影配下に居る、元春の配慮であろう、智将盛重を隆影に見せたかったのかも知れない、富田城は懐深い名城である力攻めでは落ちなかった、開城は翌九年、兵糧尽きて義久は毛利の軍門に降ったのである。

軍が敵わじと見て退却するであろう、その時を見て追撃し一挙に伯耆を攻略する作戦だったと、とある、富田城に居た味方の小早川隆影も敗戦必至、と見て援軍を送る気配は無かった。全滅を警戒したのである、だが元春には成算があった、後方と左右の三面を川、湖、断崖に囲まれ前面のみ開けた馬野山に背水必死の陣形を布いたのである、機敏な秀吉はそれを見て、自から軍を引いたのであった。たとへ勝っても自軍に出る大損害を避けたのである。……整々と帰還した元春に盛重は病中を押して対面し、祝福の言葉を述べると共に秘かに今生の別れを告げたのであった。「殿、誠に御見事な戦術で御座いました。最早私しの出る幕は御座居ません」と。一二ヶ月後、天正九年十二月二十五日、盛重は世を去った。臨終の彼の脳裏をかすめたのは、風光雄大、豊穠の地、尾高夫人の伯耆だろうか、それ共、がむしゃらに生きた若き日、栄光と共に「御五もし」を得た備南の地であつたらうか。次男の影盛を神辺城に入れる悲願は遂に成らず……冬の日本の怒涛がひびく夜であつた。……盛重の遺骨は、尾高観音寺、会見大安寺、福山三宝寺に三分された、と考へ度い。

観音寺住職の律儀さが気に入ったから。……九月二四日探訪旅行の終り頃、ふと現実に戻った私は近くに居た田口副会長に思わず尋ねてしまった。私「田口さん尾高夫人の墓は分かって居るんですか」。……田口副会長「分かりません」。……ぶつきらばうだが千金の重みがあつた。

一九八九年九月三十日

悲運の江美城跡 山陰旅行に参加して

末森 清司

いつも七月 盆ならよかる
踊りするとて殿に会う
月といっしょに出るときや出たが
月は山端 羨しゃこゝに

去年おとし踊りもしたが
ことしやお墓で灯をとます

この誌は江府町に伝わる盆踊り唄である。口づきむと何とも言えぬ情緒と人の温さが、にじんでき……

去る九月二十三、二十四日の両日

一泊の山陰旅行。当日秋晴れの下、杉原盛重公史跡めぐりに参加した。

車中案内兼講師役の立石先生の杉原盛重公と、見学地の説明の内、鳥

取県江府町にある江美城跡落城にまつわる唄であると紹介された……。

永禄八年、毛利方に攻められた尼子氏はすでに風前の灯の中、江美城にたてこもる城主蜂塚右衛門尉の一族は尼子に忠誠の義をつらぬき、毛利方の闇将軍杉原盛重以下三千の兵に攻められ同年八月六日落城運命を共にした。

城主蜂塚氏は領民に対し善政を行ったと見え落城後領民は旧領主をしたって盆踊り唄としてその徳を今に伝えていくという。

尼子氏をめぐる数ある武将の中、尼子の月山城落城の中にその支城のひとつに江美城、悲運の中に義をつらぬき花と散った蜂塚一族は私好みの武将である。そう、備中高松城の清水宗治公の様に……。

江美城跡は当時の面影を色濃く残している水田や畑地と化した本丸、西の丸跡、資料館の建っている八幡丸跡、これらをかこむ苔むした石垣くづれかけた土塁、堀切跡、外形跡等が残り充分往時の面影を偲ぶ事が出来る。

神辺城主であつた杉原盛重公の史跡めぐりの内、私の心に強く残った史跡であり城と共にした蜂塚右衛門尉の悲運が強く心に残り、旅の思い

出として文頭の唄を時折り口づさん
でいる……
機会があれば又見学してみたい城
跡のひとつとなった……。

山陰杉原盛重紀行に 参加して

藤井 忠夫

九月二十三日、二十四日、福山の
生んだ戦国の武將盛重公の戦跡を訪
ねる旅に参加しました。江府町江美
城跡。尾高城跡。観音寺。米子城跡
を経て皆生温泉泊り。

翌二十四日、大安寺の盛重公の墓
所に着く。静かな山間に建つ菩むし
た宝篋印塔、さすがが格式ある大將塚、
仏の前に居て神々しいとは不見識か
もしれないが、全く神々しく感極ま
り只凝視するのみ。暫くして同郷の
大先輩としての誼みか、久しぶりに
先祖の墓に詣でた様な親近感を覚え
すがすがしい気持ちで、しばし合掌
しました。

次に安来市の清水寺に行きました。
私は二度目の参拜で、五十六年の三
月頃参りました。季節的なこともあ
ったと思いますが参拝者は私の家族
と他に二、三人だけで、手前の堂は

軒先が崩れ落ち、向うの堂は雨漏
り防止のシートが被せてあるなど、
本堂に詫びしい状態でした。この度
訪れて見ると屋根は修理され、根本
堂は改体修理が行われており本堂に
良かったと安堵した次第です。

又、ここには蓮乗院があり、二本
の滝を配した庭園に、文化年間に大
門、仁王門の修復が行われた時、其
の廢材を以って建てられた。三坪の
草庵、この小さな建物に尺角もある
山門の柱を使い、三つの小部屋に仕
切り中央には直径三十三釐の丸柱を
たて梁の抜き穴を利用して、あんど
ん式にして、二畳の茶室、一、五畳
の水屋と台所の三部屋を照らす珍し
い茶室、古門堂があります。

広瀬町月山富田城跡。過去何回か足
立美術館に行きましたが、其の一角
に眺望の良い部屋があり窓から見え
る連山の名前を書きこんだ絵があり
中央に一際目立つ月山を配し、有名
な尼子十勇士、山中鹿介を擁する尼
子の盛衰の歴史を説明してあり、窓
外遙かに月山を眺め何時か登ってみ
たく思っ居りましたが、この度念
願かない登頂することが出来ました。
山麓に広大な尼子氏館跡の石垣、月
山七廻り軍道を登り頂上本丸跡、石
垣にかこまれ繁る樹木、そのあちこ

ちに屯する鎧武者の姿、床机に腰を
おろした武將の一团、中央にすわる
鹿介、私達の方を見て笑っている。
どうやら我々の来訪を歓迎している
ようです。色々なことがうかんでき
ます。

月山富田城の古絵図を見ると全山自
然の要崖に本格的な石垣を築き、其
の郭群は正に難攻不落の名城であっ
たと思はれます。

又、安来平野、米子、出雲平野、山
陰屈指の港美保関、出雲の鉄、大森
石見の銀山を領し、安芸、備後まで
勢力を伸ばした尼子に。攻撃をかけ
た毛利軍、吉川軍、杉原盛重の軍と
其の勢力は互格、いや尼子の方が勝
っていたのではないかと思われま

す。武勇に優れ、地の利を得た尼子が破
れた要因はどこにあったのか、隆盛
を極めた経久は三男興久を自害させ
嫡子政久の戦死、孫の晴久は五歳と
不運も重り、晴久の代となり元就の
謀略にかゝり、経久の二男国久（晴
久の叔父）が率いる尼子の柱石であ
る新宮党三千人を奇襲して壊滅させ、
晴久も四十七才の若さで急死、家督
を継承した義久も、毛利軍の富田城
攻撃の最中に、功臣の家老宇山久兼
を斬殺するなど、一門衆と譜代衆、
家臣団の統制の失敗と洞察力のと

しさが尼子滅亡を早めたように思い
ます。

一方毛利方は元就の三本矢の伝説に
みられる様に同族よく相和して内部
崩壊を防いだ、この相違点が勝敗を
決したのではないかと思考する次第
です。

この度は立石先生、神谷会長、田
口副会長始め役員の方々の熱心な説
明で盛重公の歴史を学ぶ事が出来喜
んで居ります。

武將の花押

杉原氏の巻

No. 3

府中八尾山城主

相原光房

（浄土寺文書八九号）



だらけの車中

熊谷 操子

同じ想いを抱いた者同志の一泊旅行って、実に楽しいし、とりわけ長時間の車が、和気藹藹のうちに目的地に着くのですから、こんなに素晴らしい修学旅行はありません。

この会で先ず思うのは、講師が大勢居られることなんです。参加させて貰う方としてはこれは実に有難く関連はあっても話して下さる内容がそれぞれに違い、得意とされる分野

の講話がそれぞれの角度から聴けるのですから決して退屈する暇がありません。「右前方の山を御覧下さい。

かつてあの頂上に何々城があつて……」と、それまで緊張して聴いていた耳や目を、ひととき窓外の緑にはぐしてもらえたりする時、これは素

適な演出(?)と思つたり、ちょうど頃合のいい所に山が現れたのかしらなんて思つてもみたり……。

ともあれ、備陽史には殆んど真暗な私めにとっては、この車中の講話だけでも、持ち切れないほどの有難い荷物で、最高の気分になれるのです。けれども、けれども、急勾配を目下

転がり落ちていく記憶力は、如何ともし難いのです。私の中で二人がさゝやきます。「そんなに見事に忘れるのなら、講話を速記したら」「そんなの億却よ。その時その時に瑞々しい感動を得られればそれでいいの。見てよ、こうしていつも想像の画布とパレットを持つてゐるでしょうが。同時通訳のようにこうして盛重を画いたんよ」「うーむ見事」 あきらめ哲学に徹した七十一才の彼女は、幸か不幸か、自分の上に顕著に現れている老化現象に、まだ気付いていない様子です。

講師は後部座席にも沢山おられたようです。登山道で、または山門の下で、或は仏像に接した時、そんな折節に「対一で話す時」「このお方、よう読んでいられるなあ」と敬服する事が度々あるのです。私はこのお方達を講師予備軍(失礼な言葉お許しを)だと思つております。

その次に思うのは、「なんと芸人(失礼な言葉お許しを)の多いグループだなあ」と。後部の座席からはどなたの詩吟がよく分からなかったのですが、その素晴らしいお声は名文の誉れ高いKさんではないかしらとしばし聞き惚れて居りました。隠し芸のある人は羨しいなあ。流行語ま

で生んだUさんの数え唄はとりわけ面白く、その後の我が家では、鼻を高くする時、謙譲の美徳を発揮した時は必ず「こんなもんじゃー」をひつつける派目になりました。銚子と盃の芸は酒席で色々観るのですが、この度の著芸は始めてで、明治節が現れるのも、われわれ的で愉快でしたね、早く六月号(?)を発行して欲しいものです。K先生の高校での人気は、あの震いつくような裏声が大いに一役買っているのではないかしらと、失礼な憶測をしてみました。「そこで一句」で勇名を轟かしたGさんの足芸は見事という外ありませんでした。感心して、半ば呆れて見惚れているビデオマンに「足、足」と思わずサインを送つて促したものです。話してる声はさほどでもないのに、Sさんの女人はだしの詩吟や艶歌には、識らず識らず陶醉のとりこになり果て、居りました。特にあの高音の草晴しきには不思議な魅力があつて、決して退屈さましの煙草の服のような軽い芸ではないなと思ひました。両Sさんのデュエットもぴたり息が合つていて、もっとも聴いていたい思いがしましたのに。又、いつも見事だなあと敬服するのは、お酒が入ると益々その独

特の話芸が冴えてくるという不思議な講師のSさん。このお方がいられなかつたら、あの暖かい愉快なムードは得られないだろうと思ひます。過言ではないでしょう。まだまだこの外に爪を隠していられる鷹がいらるでしょうに、そのうちに見えてくるだろう爪やへそを楽しみにしている無芸の私なんです。

十畳の間で突き合わせた枕越しにはずんだ話も楽しかったですね。五年程前でしたか、福山城のお湯殿で何回か講話を聴いた事があるのですが、その時受付嬢(?)の中に確かFさんが居られた様に記憶するので、言葉は交わさなかつたけれど、「ウワーツ、歴史の先生だあ」と、近寄り難いものを感じておりました。合つて頂けそうと胸を撫で下ろした夜でした。二十四日、何食わぬ顔で昼食を食べていられたFさん御夫婦、私は見ていたんですよその直前、三重の塔の下で、そば食つていた顔を。その健啖にも言わせる若さをとても羨しく感じた午後でした。お花三昧で優雅な日々を過ごしていられるSさんとも、チョロツとでしたが、古代史の話も出来たし。米子城へは「オレはよう登らん」と威張るビデ

オマンに心ならずにつき合ってしまったが下界でのお連れがまだ二人居られて心強い(?) 思いがしまづかしい今の世に、敢然と立ち向かっていられる S さん、みんなそれぞれ被っていた女性特有の猫の面を外して、一つの釜の飯を二回食べると八人の女性はまだ十年の知己のように打ち解けて、実にさわやかな空気の朝を迎える事が出来ました。男女を問わず再会を約す顔顔、掌掌は、みな善人そのものだと思えました。

永久に会う事の出来ない昨日と、まるで見えない明日とのぼさまの今日の刻を大切にしながら歴史を読みたいと、いつも思っています。そして講師だらけの、芸人だらけの、善人だらけの車中に私は恋する事に決めました。

山陰の旅 つづり方狂(教)室

後藤 匡史

昨日までの雨も止み、雲の間から太陽が江美(笑み)を浮かべ、まるで観音様(観音寺)に出合った様な、今日が大安(大安寺)だったら結婚式に、もって来いの日である。そう考えながら、この皆生(開基)は誰とそんな武将(無精)を云う人は……

そうこうしているうちに、このあたりが杉原盛重と山中鹿介が、お尾高(逢うた)と云われても四百年の昔のこと二人が大山(対戦)したことは事実であるから、まあそれはそれとして思わぬことで米子城へ行き、その本丸からの眺めは城々(上々)であった。

それから宿へ行き野球場でもないのに幸楽園(後樂園)しかし風呂へは入って滝に打たれると云うじゃないか、流石、違えねえ。

二日目は瑞光山清水寺、天台宗のお寺でバスもスイスイと流れる様に。山中鹿介ゆかりの月山城では、その城郭の大きさに皆んな一様にホント富田、ホン富田(本当)

そして帯刀先生吉晴公の墓所を訪ね……何……先生、皆んながそう茂助(申すけん)んそこにも鹿介供養塔がありを見ながらヒーヒーいつては山頂を歩き、そのあと松江藩主七代松平治郷(不味)公が愛用した桜井邸の庭園を見て、ここを最後にこれがホントの桜井の別かれ(楠正成、正行の故事より)一路福山へ、バスの中では排て句、カラオケ何んじゃもんじゃ楽しい一泊二日の旅行を終えた。

一句

五十三(後藤)が

一句考え、又一句

これがホントの四句(死苦)

八句(八苦)

(注) ①堀尾吉晴公の幼名茂助

山陰杉原盛重紀行拾遺

○木洩れ陽に盛重殿の廟静か

立石 定夫

○盛重公の名に恥じぬ墓に参りて

心おどる 神谷 和孝

○あくまでも赤く妖しく曼珠沙華

熊谷 操子

○山陽山陰股にかけ

杉原盛重ここにあり

後藤 匡史

○月山や上り下りのしんどきよ

○墓をみてしのぶ武士あわれきよ

○月山やあ月山や月山や

末森 清司

○虫の声ここにつわものねむれしか

金永 真澄

○立ち並ぶ宝篋印塔五輪塔

昔の夢よ今いずこ

○静かなる宝篋塔にせみ時雨

佐藤 錦士

尾道鷲尾山城主

梶原信平

左衛門信平

(浄土寺文書二〇号)

尾道木梨家城主

梶原為平

木梨家

(浄土寺文書三二号)

山陰旅行をおえて 杉原盛重公の 足跡を訪ねて

佐藤 錦士

九月廿三日朝八時、福山駅出発。めざすは出雲、伯耆の国である。

備後随一の猛将 杉原盛重公の足跡をたずねて一泊二日の旅行である。

まず最初に昼過ぎ江美城跡に着く。

江美城は山の高さ三十米前後か、想像したより大きく坂を登れば最初に二層の櫓の歴史資料館が目にとまり、その上に西の丸跡がある。これが本丸か、随分小さいなと思ったら、右隣の田んぼが本丸とはハァおどろきましたね……。ヤレヤレどーなつ

とるならこりやーですが、およそ一反はあろうかと思うくらい広うござんす。幅五米以上はあるかと思われる堀切りが有り、その後はズート田んぼが続く、これは防御の面では大変弱そう。末森さんか誰か忘れましたが、下の墓地に大きな二米余りの五輪塔を二つ見付け、かなり古そうでした。坂道を通ってた人に聞いたが昔から有るとの事で誰の墓かわからないそうです。土居がかなり広く公園や神社、公民館など有り、一

寸した学校くらいか。神社のけやきが二、三百年はタツトルンではないか、根廻り四米はあるかと思われた。全体の印象として防御の面で前と左右側はマァマァーですが後側が弱点と見ました。

大山を背にしたり向ったりしながらバスで早くも米子に着き、時間があるので米子城跡に登る。百米近い高台にあり見事な石垣が残り、その当時は中に立派な城ではなかったかと思われる。頭首を廻らせば、はるか前方に大山を望み、又眼下には町並や中海が見え、見晴にも持つて来いです。後はゆっくり皆生の湯につかるだけ。美人と二人で湯に入れば最高でしょうが独身者では背を流すのも「勝手にしやがアれエーで、後藤さんヨドー思う」ホンマニ セツニ ヤーノーヤァー

九月廿四日、彼岸花の咲く田園風景の道走って盛重公を祭つてある大安寺を目ざす。お寺へ行く道は、真線の一本道。この道がお寺で行き止りお寺へ参る為に着けた道みたいに見える。お寺に着くと水子地蔵が多くさん祭つてある。それを横目に見てお寺に入る。生れて初めてわけも分らずお経を上げる。

る立派な宝篋印塔、背丈以上もある。それが盛重公の墓である。見るからにコケむして時代がかった古き、中々の貫禄である。立石先生の名調子の説明を聞きお墓に向つて、福山の佐藤です。いずれあの世に行ったらあいさつに伺います。と心中つぶやき、何にか一句と考えましたが中々うかばず。

向か一句 一句どころか
四苦八苦

帰宅してから夜も寝ずに考えた。

結果

○宝篋塔戦国武将がしのばれる和歌

○おとずれて古寺の裏に宝篋塔
杉の木立に秋風を聞く。

○古寺や一本道にマンジュシャゲ

○宝篋塔杉の木立にせみしぐれ

○マンジュシャゲ道の向の古寺かな
短歌

○杉原や 兄弟が骨肉 相い争い
盛重の死後 又あわれなり

○コケむした宝篋塔にたたずめば
戦国武将の夢又いすこ

○旅の夜の寝むれぬままの
迷句かな

大安寺を後に盛重公にお別れして、清水寺に参り、三重の塔に登る。杉の大木が雄そうだ。参道の石段が

すりへつて歴史を感じる。お伊勢さんを思いだした。

さて、いよいよ私の大好きな山城である。尼子氏の本拠地、富田山城跡。最つとも見たかった山城。書物、写真などでは見ても実際に見るのは初めてである。バスで向っていると直感でアレかとすぐにわかった。

見る方向で随分と形が違つて来る。上が平で長く見えたりオニギリ山に見えたり変化に富んでいる。比高二百米以上はあるかな。目の前に立つと中々要害堅固な三角形の見事な山城中の山城である。これがあるばかりに尼子氏は山陰からはなれられなかったのか。御殿平、大手門跡など野球でも出来るほどの広さか、私のいままで見た中で一番大きい、おそらく中国地方一だろう。秀子さんと二人一番ビリをボチボチ登る途中井戸跡、石垣、お墓など見ながらやつと本丸にたどり着く。しばらく進むと堀切りがあり、その向にも一つ。これが本丸で、最初のはどうやら出丸らしい。井戸跡が二つ有り古いもみじが目につく。

私は城跡に立ゝずむと何時も何んとも云えぬ感傷にふけります。

人の世の有為転変、無なしさや、淋しき時の流れ悠久の思いにかられま

す。これは私一人だけではないかと思ひますが。しかし天地自然は変わりなく春秋をくりかえし、そこに人の世の無情を感じます。城跡には檜やけやきの老樹が廻りにおいしげり今は昔日の面影はみじんもなく、「夏草や兵者共が夢の跡」と奥の細道の一節を思い出します。

そこで、又一句なるかならぬか感じたまゝ短歌を一つ

月山や

こけむす古木が おいしげり

城跡守る 古武士かな

以上

田尻史跡めぐりの

御案内

十一月十二日(日)に福山市田尻町の史跡めぐりを計画しています。主な見学地は次の通りです。

・田尻民俗資料館 どの地方においても急激な社会生活の変貌により生活様式は変わり、先人の使用した民具はいつの間にか消え去りつつあります。田尻町では昭和四十六年から民具の収集保存を町ぐるみで行い、昭和五十一年には民俗文化財として一〇二二点が県指定となりました。

・王ヶ峰古墳 田尻町には他に縦穴

式石室の金鶏塚など数基の古墳がありますが、いずれも破壊されておりこの二基の横穴式石室が保存されているだけです。

・八幡神社 吉備高島宮跡の伝承があります。九月三十日の夜大祭の前夜祭があり家族を連れて見学に出かけました。飴湯と餅のふるまい、踊りに続いて神楽が奉納されました。

太鼓のリズムに合わせて鬼や武者の勇姿が神前で舞うと子供も大人も輪になって見とれていました。翌日は有名な「はね踊り」や神輿渡御などがあつたのですが都合で見学できず残念でした。

・御舟入跡・ともづな石 水野勝成は出府や鳥原の乱の時楠の木で造つた大天神丸という舟を利用しました。帰国の時箕島の山でのろしを上げ満ち潮に乗り芦田川を上ったそうです。大天神丸と引き舟「大八幡・小八幡」の座床が当地に有りました。

・潮風呂跡 勝成が晩年腸の病の治療の為に当地に潮風呂を作りました。海水を釜に入れ沸して入浴したとことです。そばに風呂明神が祭られています。

その他旧新鉄道路跡など見学する予定です。

備陽史探訪の会主催

十一月十二日

田尻町の史跡めぐり要項

講師 歴史民俗研究部会長 種本 実氏

一、日程

福山駅前——民俗資料館——
9:00——9:30——10:00

——新鉄道路跡——御舟入跡——
10:10——10:30——10:30——

——ともづな石——王ヶ峰古墳——
10:50——11:00——11:30

——高島公民館にて昼食と講演
12:00——13:30

「田尻町の歴史について」
田尻民族資料保存会会長

来山敏夫氏

——八幡宮——金鶏塚跡——
13:50——14:30——15:00

——資料館前バス停で解散
15:30

二、会費 会員二〇〇円

一般(歓迎)三〇〇円
(バス代は各自負担)

三、その他

①集合 駅前的人像前8:50
民俗資料館前9:30
いずれか

②弁当持参

③歩きやすい服装で

④雨天は中止

四、問い合わせは事務局まで

神辺城主

杉原盛重

(横山文書一八号)

杉原元盛(盛重嫡男)

(横山文書一六号)

杉原景盛(同次男)

(三吉文書三号)

田尻

バスツアー

〃 古代吉備国探訪 〃

参加者募集

十一月五日吉備路古墳めぐり

(主催 備陽史探訪の会)

今年の秋は「吉備路」を訪れます。「吉備」と言えば、古代史において重要な地域です。畿内地方の大前方後円墳に匹敵する大型の古墳を築くことができた。その勢力の基礎になったものは何だったのでしょうか。

弥生時代の最終末頃に、倉敷市矢部に榊築遺跡と言う、径約五〇mの巨大な墓が作られます。北側に広がる弥生時代の集落を見下ろす位置にある文字どおり首長の墓と言えます。また、吉備津神社の建つ吉備中山には、古墳時代前期の吉備中山古墳がありますが、その南方に全長一四〇m余りのギリギリ山古墳も築かれています。前方後円墳の美しい姿を見ることが出来ます。

そして、「吉備」を代表する二つの「つくりやま」。岡山市新庄下の造山古墳は全長三五〇m余り。全国第四位の規模。総社市三須の作山古墳は全長二九〇m余で全国第九位の規模。あまりの大きさに「山」かと

見まちがえるほどの大型前方後円墳を実感してみたいと思います。

最後に、古墳時代後期の大型横穴式石室を見てみましょう。総社市上林にある江崎古墳は、横穴式石室長約一四mで、中の石棺も見学できます。国分寺横のこうもり塚古墳と共に、最後の前方後円墳と言えます。

さらに、高梁川を西に渡った真備町箭田大塚古墳の石室は全長一九m。特に石室高は四mに近く、巨大な空間を感じることが出来ます。

このほかに、大小の古墳、遺跡が残されている「吉備路」です。

「塩」と「鉄」により畿内に対抗しうる力を持ったと言われますが、広がる総社平野を見ながら、あなたなりの「古代吉備」像を作ってみてはいかがでしょう？

講師 古墳研究部会 網本善光

・時 一九八九年十一月五日(日)

・集合場所及び時間

福山駅裏キャッスルホテル前

午前八時集合

※午後五時帰着予定

・会費 会員 二九〇〇円

非会員 三二〇〇円

(貸切バス代他実費)

・定員 四五十名

。申し込み方法

左記までハガキか電話でお申し込み下さい。

〒720 福山市多治米町五一九一八

田口義之方

備陽史探訪の会事務局

☎0849-536157

・備考 弁当持参、山歩きできる服装で、雨天決行

・問い合わせは事務局まで

城郭研究部会主催

第三十四回中世を読む会

・中世武家文書を読む

『山内首藤家文書』の巻(三)

○時 十一月十七日(金) 午後七時

○場所 中央公民館 2F和室

○会費 無料(テキスト代は要)

○問い合わせ先(事務局まで)

今後の予定

十二月例会

○時 十二月三日

城郭部会の案内により、福山市内の中世山城を見学する予定です。

詳細は後日お知らせします。

事務局より

☆ 来年は、いよいよ創立十周年の記念すべき年です。役員一同張り切って準備を進めております。

☆ 前回御案内した、会報復刻版の発刊準備も順調に進んでおります。

ただし、広告の申込は、まだ七件です。会社、個人、団体、名義は問いませんので奮って御申込下さい。

☆ 会報も今回で四十五号となりました。以前に較べて、会員よりの投稿が増え、毎回、読みごたえのある会報になったのでは、と自負しております。これからも皆様のご投稿をお待ちしております。

備陽史探訪の会事務局

〒七二〇

広島県福山市多治米町

五一九一八 田口義之方

☎(〇八四九) 五三一六一五七